

セツ の あしん

NO.76



ひと と 言

教員は「宣言」しよう！

瀬成田 実 (センター運営委員)

目次

ひと言	瀬成田 実 1
特集 震災から3年半	
あの時、そして今わたしが考えていること	丸子ちひろ 2
復興する巨理、そして心も	遠藤 信 3
あの日の自分	近藤 翠 4
一日一日を大切に	阿部 大夢 5
震災そして復興へ	高橋 光生 6
記憶が消えそう	阿部 成美 7
あの日から	濱畑 千春 9
今伝えたいこと	阿部 美優 10
忘れないで	鳴瀬未来中三年生 『『命』とは何かの授業』より
私の震災体験	高橋 佑麻 12
「私の震災体験」を読んで	黒須 政貴 13
教室の報告	
私の教室	岩淵 恭子 14
報告 フォーラム「子どもの今と未来を考える」	
PARTVI「今どきの放課後事情」を考える	須藤 道子 16
わたしの出会った先生 7	
私の出会った二人の先生	伊藤 博義 18
教育時評	
国家が「道徳」の教師になる怖れ	中森 孜郎 19
本の紹介	20
センターの動き	20

「行く」と元気がなくなる学校」

ある講演で、講師がそういう学校が増えていると語った。言うまでもなく管理と長時間労働が原因だ。

教育長や校長は、私との懇談の際、よくこんなことを言う。

「部活熱心な先生もいるからねえ」「早く帰ろう言うんだけど、うちの先生たちは熱心でね、帰らないんですよ」「事務作業は上から下りてくるものがほとんどだから、減らすのが難しいんだよね」

これでは問題は解決しない。教育長や校長には教職員を守ろうという意識はあるのだろうか。では教職員のいのちと健康は誰が守ってくれるのか。個々の人間の「自己責任」なのか。そうではない。労働基準法も労働安全衛生法も教師には適用される。そのことを改めて教師は認識しよう。体調を崩してからでは手遅れだ。「過労死」したら家族がどれほど悲しむか。

どうやら、法律を学校にあてはめる 闘い に立ち上がるしかないようだ。「行く」と元気になる楽しい学校にしよう」「希望をはぐくむ学校が、ブラックであってはならない」「自分の心と健康を大切にできない教師に子どものための教育などできない」

まず、そう宣言する。次に、行動に移すのだ。

あの時、そして今

わたしが考えていること

3・11以来、毎号震災にかかわる文章を、先生方をはじめ多くの方に書いていただいておりますが、今号は小中高生のみなさんに書いてもらおうと考えました。時間がこれ以上になると書いていただくことが難しくなりそうに思えたのです。何しろ小学校で言えば、あの3・11は今6年生が2年生の時になっていくので、大震災後のこれからの考えることはできないはずだし、必ず

いろいろな場で活躍していく若い人たちの声を聞かないで、大震災後のこれからの考えることはできないはずだし、必ずいろいろ考えていることがあると思うのです。

(春日)

復興する巨理、そして心も



丸子 ちひろ

(巨理・長瀬小6年生)

私の生活は、あの東日本大震災によって大きく変わりました。学校には津波が押し寄せて校舎がつかえなくなり、吉田中学校の間借りの学校生活となりました。私の家も、大規模半壊のため住めなくなり、仮設住宅に住むことになりました。今まで、私にとって当たり前だった生活が、震災を機に一変したのです。

あの震災から3年が経ち、巨理町は復興してきました。田植えをする水田がじよじよに増えてきました。そして、イチゴ団地もできました。震災で被害にあったイチゴ農家がまたイチゴをつくらうと立ちあがり、巨大なイチゴ団地に参加しました。巨理のイチゴづくりが再開し、巨理は大きく復興したと思います。

被災した家を直してもどる人、新しく家を建てる人も増え、仮設住宅を退去する人が増えました。

私の家もできて、去年仮設住宅を退去しました。被災した前の家に比べれば小さいですが、自分の部屋もあります。新しい家を建ててもらい、親には感謝しています。振り返れば、せまい仮設住宅での生活は、心もきゆうくつな思いをしていたと思います。でも、今はそんなこともなく、心にゆとりができました。以前に比べ、イライラすることも少なくなりましたし、妹のけんかも減った気がします。

そして、学校生活も、もうすぐ変わります。吉田中学校を間

借りしている長瀨小学校ですが、今年の夏には新しい校舎が完成し、2学期からは新しい校舎での生活が始まります。

今は中学校での生活なので遊具がありませんが、今度は遊具もあるそうです。私はもしあるのならブランコに乗りたいたいと思っています。新しい長瀨小学校での生活を友だちも楽しみにしています。

どんどん変わる生活ですが、残念なこともあります。今年の夏に、防災集団団地に新しい家が完成し、引越す予定だった友だちがいましたが、完成が遅れているそうです。大工さんが忙しかったり、材料がそろわなかったりするからだそうです。とても残念だと思います。

あの日の自分



今後、災害公営住宅ができると、仮設住宅から出る友だちがどんどん増えます。仮設住宅は、せまいです。ほとんど一人の空間も作れないし、寝る場所も十分にとれません。それに、場合によっては、近所迷惑になることもあります。いろいろなところがあるから、ストレスがたまるのです。だから、早く災害公営住宅ができてほしいです。

水田、イチゴハウス、学校、そして、住宅。巨理の復興は、これからも目に見えて進んでいきます。それとともに、被災した人の心も少しずつ復興していったらいいなと思っています。

(当時 同小2年生)

遠藤 信

(石巻・稲井小6年生)

3月11日、あの日のぼくは、女川一小に通っていました。女川の家と稲井の家を行ったり来たりしていました。あの日はお母さんが仕事が休みだったので、稲井の家に帰る日でした。

教室で友達と話しながら、お母さんが迎えに来るのを待っていた時に地震が来た。揺れが収まるまで、机の下に隠れていました。先生に校庭に出るように言われました。

校庭に出たら、地面が割れていた。しばらくたつて屋上に移るように言われて、屋上に移った。百人くらいの生徒がいた。外にいと寒いので児童クラブの前で待機していた。そのとき友達と、

「もし迎えが来なかったらどうする。そしたら学校に泊まることになるかもね。」

と話していた。とても不安だった。冬のようにとても寒かったので、体操着に着替えて、みんなで毛布にくるまっていた。お母さんが迎えに来た。

津波のせいで、学校まで車で来れなかった。浦宿の駅の前から歩いて来たそうです。

歩いている途中、友達のお母さんに駅の所まで、送ってもらった。道路がぬれて水害だ。

「何で。」

と聞いたら、

「津波だよ。」

と言われた。女川一小は、少し高い所で、山の近くだったので、直接津波は見えていない。学校の近くの家もこわれていることは

なかったので、少しの津波なんだろうなと思った。帰る途中も、道路が割れていたり、車が乗り捨てられていたりして、とても道が混んでいて、いつもの倍の時間がかかった。

家に着いてから、夕方になりいとこ達が、ぼくの家に避難してきて、真つ暗い中でみんなでごはんを食べ、茶の間で固まって横になった。その間も何回も地震が起きて、とてもこわかった。

次の日お父さんが青森から急いで帰ってきて、女川のおじいさんとおばあさんを探しに女川に行った。女川の町のように聞いて驚いた。山の上に建っていた町立病院の1階まで津波が来て、ほとんどの家が流され、たくさんの方が死んでしまった。ぼくの家族はみんな無事だった。

それからは、女川の学校に行くことはなく、稲井小に通うことになった。知らない人ばかりで友達ができるか心配でした。

一日一日を大切に



近藤 翠

(岩沼・玉浦小6年生)

私は3月11日あの日に思ったこと、それは家族のことです。私と弟とお母さん祖父母は高い場所所にいました。お父さんは自衛隊の仕事をしているため、いつもの仕事場にいました。お父さんに会えたのはその翌日でした。会えた時は涙が出ました。この日のこと、この日の思いは忘れたことはありません。

この震災を経験して今思うこと、それは、家族を失った方々それから復興のためたくさん数えきれないほどの支援をしてくれた方々への思いです。家族を亡くされた方々は3年という月

今回の震災を受け、地震の後には、大きな津波が来る。稲井だから大丈夫ではなく、高い所に急いで逃げることを、何度も教えられた。

3年半が過ぎ、地震もあまり起きなくなってきたが、ぼくは何回も地震や津波の夢を見た。家の人達の話では、ぼくはともイライラしていたそうです。

あんな大きな地震は、もう起きてほしくない。でも、いつどこで地震が起きるか、わからないので、大きな地震の後には、津波が来るから、どこにいても高い所に避難する。将来大人になって、自分の子どもができた時、きちんと自分が被災した時のことを伝え、一人でも多くの人の命を救えるようにしていきたいと思えます。

(当時 女川第一小2年生)

日はとても早いと思います。それでも勇気を出して震災に負けない気持ちでいられるというのはとてもすごいと思います。私にはできないと思いました。私が家族を亡くされた方々にできることは少ないと思うけど、がんばってほしいと思います。

私の通っている小学校も、海の近くでも大きな被害を受けました。でも、復興にむけての活動や訓練ほどの小学校よりも多くやっていると思います。他の県の小学校の方々からも、支援の物や復興のための思いを書いた手紙をもらいました。私



たちのために、こんなに支援物資や手紙をくれて本当にうれしかったです。今、南海トラフなどの四国や近畿地方での大地震や大津波が予想されていますが、本当に起こってしまつたら、次は私たちが支えてあげる時だと思っています。

私は東日本大震災を経験して、一番強く心に残っていることは、人々や家族の命の大切さやみんなで力を合わせれば何でもできること、二つの大きなことをわかりました。また、いつ大きな地震や大きな津波がくるか分からないから、一日一日を大切に過ごしたいと思います。

(当時 同小2年生)

震災そして復興へ

平成23年3月11日、東日本大震災が occurred しました。

地震がおきた時、僕は学校で帰りの会の準備をしていました。その時、急に来たすごいゆれに、みんなおどろき、急いで机の下にもぐりました。教室の時計が落ち、何人かの女の子が「こわいよー」と泣きだしました。僕もこわくてただ丸くなっていくしかありませんでした。

ゆれが止まり、先生の指示で僕たちは校庭へとひなんしました。並んでいる途中、「津波がくるぞっ」というだけかの声がかきこえ、僕たちは学校のもつと上にある総合運動公園まで走って逃げました。その時のゴーという波の音とバキバキという家が流される音、そして変なおいは今でも忘れられません。

体育館に入り、余震が続く中、みんな朝が来るのを待ちま



した。明るくなり、お父さんが迎えに来てくれました。家族が全員無事だと聞き、とても安心しました。高い所にある家も流されなかったと聞きホッとしました。でも僕のクラスで家が残ったのは、僕ともう一人の友達だけだと知りとても悲しくなりました。

家までの帰り道、僕の見た景色に女川町はありませんでした。道はなくなり建物は流され、大きな船が陸に上がり、町はメチャクチャでした。僕は何がおこったのかわけが分からず、ただ、だまって歩くだけでした。

それからの生活は、今まではぜんぜんちがいが、電気も水もなく、食べ物もなく、外を歩くことも車で出かけることもできなくなりました。暗くなればねて、明るくなれば起きて、テレ



阿部 大夢

(女川・女川小6年生)

びのない生活がこんなにつまらないのかと初めて思いました。

でも、お母さんは「家が残ったことがどんなに幸せなことか」といつも言っていました。友だちはゲームも服もくつも、おもちゃも全部流されてしまったんだと思うようになりました。まんをしなくてはいけないんだと思うようになりました。

少したってから学校が始まりました。スクールバスがむかえに来てくれて、友だちに会えるようになりました。僕は、それが何より一番うれしかったです。

あれから3年半が過ぎ、僕の家は、災害危険区域になってしまいました家をこわすことになってしまいました。今まで住んでいた場所から少しはなれたところにあるアパートに引っ越ししました。本当は家をこわしたくなかったけど、これも復興のためと、家族で話し合い決めました。

記憶が消えそう



何もなくなつた女川で、みんながゼロからスタートしました。

まだ3年しかたつていませんが、町は明るく、前向きに復興にむかつて進んでいます。「希望の鐘」という商店会もできました。大きい建物だったマリンバルも、場所を変えて小さくなりましたが、みんながんばっています。秋になればサンマの水あげでたくさん船が入り、とてもにぎやかになります。

復興には何十年もかかると思います。そのころ僕は大人になって何をしているのだろうかと考えます。今の僕たちにはできることは、とにかく元気でいることだと思います。そして決して震災を忘れないこと。

大人になつた時、ゴールを目指す復興の力になり、生まれ変わった女川をつくつていきたいと思っています。

（当時 女川第二小2年生）

高橋 光生

（女川・女川中3年生）

平成23年、3月11日。当時小学5年生だった僕はあの日、学校から家に一人で帰宅の途中でした。

その時、突然大きな揺れが起こりました。とても大きく横に揺れ、僕は立ち止まつてその場にしゃがみこみました。その時思いました「一体どうなつてしまふんだろう、死んでしまふのだろうか？」そのうち揺れが弱くなつてきました。

そこで僕は、学校に戻るか家に帰るか考えて、家に帰る途中でお父さんやお母さんに会えるかもしれないと思い、家に小走りに歩き始めていました。僕の家は女川湾の海の目の前にあり

ました。でもそんなことも考えずに帰つてしまいました。そして途中で友達に会い、一緒にその友達の家の前に行くと、近所の人に「空地の広いところに集まりなさい」と声をかけられました。そこでじつと待つことにしました。

次々と余震がおそい、そのたびにゴゴと裏の崖が崩れる音や、ガシャーンと家のガラスが割れたりする音が周りから聞こえてきました。サイレンが町中に響き、放送が聞こえました。

「大津波警報が発令しました。皆さん、逃げてください。」

それを聞いて僕も友達もとても怖くなりました。怖さを紛ら

わそうと友達と話したり、うろうろと動いたりしていました。

どうしたらいいか分からないまま道路の方を見ていると、お父さん、お母さん、妹が乗った車を見つけました。そしてお父さんが僕を見つけてくれて、一緒にいた友達と車に乗りました。その車の中で、町中が大変なことになっていると分かりました。道路は、高台に避難しようとしているたくさんさんの車で渋滞になり、家もたくさん壊れていました。

僕たちは抜け道を通って、津波を見ることなく高台にあるいとこの家に逃げました。避難して少ししてから雪が降り始め、僕も頭の中が真っ白になっていました。

お父さんが下の様子を見に行つて帰つてくると、「家が津波に流されて、何もなくなつてしまった。」と言いました。その時、僕は「もう帰るところがないのか。」と思いました。

その後数か月の間、いとこの家に避難しました。電気と水が止まって、飲み水は沢に汲みに行き、お風呂はずっと入れませんでした。食べ物も少なく、家にあつたものをみんなで分け合つて食べていました。それからだんだんと救援物資が来るようになり、一か月くらいしてから電気がつきました、電気が付い

あの日から



た時はとてもうれしかったです。

そして、今僕は、仮設住宅に住んでいます。たくさんの人達に支えられて生きています。

あの日のことを思い出すと、とても悲しくなります。たくさんの家や物、人、そして友達を亡くしました。朝、学校に行くとき友達と待ち合わせした場所や、学校の帰り道、友達と遊んだ場所も分からなくなりました。それはまるで僕の記憶から消し去られたようでした。

あの日から3年以上が経ち、町も少しずつ復興してきています。まるであの日のが嘘のように、ガレキもなくなりきれいに整地されています。

ですが、僕は、あの日の上出来事が忘れさられてしまうことがとても怖いです。

あの日の上出来事を繰り返さないように、体験したことを、今後世の中の人達にしっかりと伝えていかなければならないと思います。

(当時 女川第一小5年生)

阿部 成美

(南三陸・志津川中3年生)

変わらない人生なんてないというけれどこんなにも変わってしまうものなのでしょうか。あの日から変わってしまったことがたくさんあります。そして、それと同時に得たもの、なくしてしまつたものがあります。

震災からもうすぐ4年が経ちます。住む場所、学校生活、4年前に思い描いていたものとは全く違った環境で過ごしています。ずっと、あの海を見ながら、戸倉の地で育っていくものだと思います。

あの日から私が得たものは、人への感謝の気持ちと助け合うことの大切さです。あの日、小学生だった私たちは、近くの高台にある神社で一晩を過ごしました。雪が降る夜、不安がつる中、どんどん気温が下がっていき、涙を流す子もいました。そんな中で、一緒に避難していた地域の方々が神社の下まで降りていき、流されてしまった住宅などに残っていた木を取ってきて焚き火をたいてくれたのです。真つ暗で寒く、不安だった夜に、その火はとても暖かく感じました。この火がなかったら私たちは不安に押しつぶされそうになっていたと思います。そう思うと地域の方々には本当に感謝すべきだと感じますし、この夜の出来事は忘れてはいけないことなのだと思います。

避難所に避難してからは、服、食事、生活用品、全て支援していただきました。数えきれないくらいたくさんの人からの支援には正直、とても驚きました。こんなにも世界中の人たちから自分たちが支えられていると思うと、前へ進まなければならぬという思いがわいてきました。そんな思いと同時にどんな形でもいいから感謝の思いを伝えたいと思いました。

この震災をとおして、「ありがとう」という感謝の言葉の大切さを深く知ることができたのではないかと思います。

そしてなくしてしまったもの、それは人の命です。私はこの震災で母方の祖母、祖父、母の妹を亡くしました。今でも思い出すと涙が込み上げてくるときもあります。そして、祖母はまだ見つかっていません。実の母を亡くす、私の母は今、どんなつらい思いをしているのでしょうか。私には計り知れませんが、人の死と向き合うことは、言葉では簡単に言い表せないほどつらいことなのだと思います。私はそんな母に寄りそってあげなければなりません。そして、私自身も人の死と向き合っていかなければならないのだと思います。母とともに祖母がいつか見つかる

る日を願っていたと思います。

人の命の重み、これも震災をとおして感じることでできたかけがえのないものだと思います。

変わってしまったこと、なくしてしまったもの、たくさんありますが、その分たくさんの方のことを身をもって感じることもできたと思います。

この震災によつていただいた支援への感謝の気持ちを忘れず、何らかの形で、少しずつでもいいので全世界に伝えていきたいと思っています。そして自分たちのようにつらく、苦しい思いをしている人にそつと手を差し伸べてあげられるような人になりたいです。

そしてこれから生まれてくる新しい命たちに、あの日の出来事を語り継ぎ、未来への教訓として、二度とこんなにも大勢の命が失われないようにしたいと思います。

(当時 戸倉小5年生)



今伝えたいこと

濱畑 千春

(石巻・宮城県水産高3年生)

私の家は、石巻市の尾崎という所にあります。石巻市のほとんど北の端、新北上川の河口近くです。遠くに行つて、どこから来たの？ と聞かれた時、「大川小学校の近くです」と言うことが分つてもらえるのが、複雑な気分です。

3月11日の大きな地震の直後、私は飯野川にいましたが、祖母が心配なので親の車で家に向かったところ、尾崎に入る橋桁の落ちた橋の上から、大きな津波が来るから逃げろと言われ、あわてて引き返しました。車で逃げる途中、松林を超えて津波が来るのが後に見えました。北上川をしじみ漁船がすごいスピードで上流の方に流されていくのも見えました。大川小学校の前まで来た時、釜谷の人たちがのんびりしているのに驚きました。大川小学校の生徒たちは校庭に整列していました。私たちは、「津波が来るから逃げろ！」と周りの人に言いながら、横を通過し、雄勝トンネルの方に逃げました。

私は、その時に見た光景が忘れられないので、そのことを中心に書くと思います。テレビでも報道されたことがなく、もしかすると書いてはいけないことなのかも知れませんが、やはりどうしても書いておきたいのです。

私が、震災から3年半が経つた今でも思うことは、大川小学校に対する市の対応の悪さです。石巻市の職員の方々も大変な状態だったことは分かりますが、対応が遅く、落ち着いた頃になつてから初めて、大川小学校でなぜこんなにもたくさんの子

い生命と教員が亡くなったかということの調査を始めました。しかも、その後、調査書を処分してしまったことに私は驚きました。なぜ、せっかく調査した調査書を処分してしまったのでしょうか？ 亡くなった子どもたちの保護者がどのように思うのか分かっていなかったのでしょうか？ 亡くなった子どもたちの保護者が、裁判を起こして今でも争っているのは、分かる気がします。

大川小学校については、もうひとつ言いたいことがあります。それは、大川小学校やその周辺地域へ県内外から来る方々の態度です。

県内外から大川小学校の現状を見に来るのはいいのですが、その地域で働いている地元の人たちの仕事の邪魔になるような行動をする人がいます。市場に魚を持って行こうと車で急いでいる時に、その前を景色を見るためにゆっくりと運転して迷惑をかける人、道路脇に軽トラを止めてカキが入った箱を積み込もうとしているカキ養殖業者の人に、邪魔だと文句を言つて車をどけさせ、仕事を中断させる人たちがいます。無断で土地に入つて勝手に歩き回っている人もいます。なぜ、被災地を見に来ただけの人たちが、我が物顔で歩き回り、地域の人々に迷惑をかけて帰って行くのでしょうか？ 私にはその人たちの気持ちが理解できませんし、そのようなことをされると、逆に、来てほしくなくなります。

私がおうひとつ思うことは、都市部やテレビによく出る地区の復興と、誰も知らないような小さな地区の復興とに、大きく差があることです。

なぜこのようなことを今になって言っているかというところ、石巻市の中心部、仙台市、テレビによく出る気仙沼、大船渡、南三陸などは、復興のためのお金も多く出ているようですが、小さな知られていない地域に回されるお金は少ないため、3年以上経った今でも震災当時に近いままや、取り残しの瓦礫があるままになっています。中心部では復興したと言っても、その他の地区は軽視されて、ボランティアの方に頼って自分たちでや

忘れないで

「ドーン」という轟音と共に背中を殴られた。今までに経験したことのないほどの揺れが、私の平衡感覚を奪った。これまでに、大き目の地震は何度も経験してきたが、今回ののは規格外の大きさだった。揺れが小さくなり足場を確保できた私は、すぐさま必要最低限の荷物と犬を連れ高台へ避難した。そこら中から聞こえてくる悲鳴。しばらくすると、地を這うような「ゴゴゴゴゴゴ……」という重低音が聞こえた。津波だった。重低音の正体が津波だということに気づくのに時間がかかった。私の家は町の奥の方、津波が来るということを全く予想していなかったからだ。それは、周りの人も皆そうであっただろう。その場にいた全員が絶句した。

らなければ復興できない、という状況があります。

これらの二つのことから私が言いたいことは、震災は自然災害なので防ぎようはないですが、その後、被災地に対してはいろいろな意味で配慮してほしい、ということですよ。すべての地域の復興を平等に進めていき、3年後、4年後にすべての地域が復興できているという状態を現実にしてほしいと思います。

私の家は石巻の北の端の小さな漁村ですが、その集落が大好きです。そこが昔のような静かで美しい場所に戻ってほしいと思います。

(当時 大川中2年生)

阿部 美優

そんな中間こえてきた、建物がメキメキと壊れながら流れていく音、車から鳴り響くクラクションの音、どこから聞こえてくる叫び声、波がうねる音。耳を塞ぎたくなるほどの音だった。その光景は、まるで映画で観たワンシーンのようだった。目の前での出来事なのに、どこか遠く感じた。波が落ち着き音が小さくなったのを見計らい、私は家に戻り現実を否定するかのようになり毛布に包まった。

次の日、夢であってほしいと願った光景は、残酷にも目の前に広がっていた。

無残に崩壊した建物、ボロ雑巾のような動物の死体、目を背けたくなる状況だった。姿の見えない家族を必死に探す声や姿は、私の心臓を締め付けた。避難所では、家族へのメッセージ

で掲示板が埋まり、人々が身を寄せ合って暖をとっていたが、私には、恐怖や悲しみを和らげようとしているようにもみえた。たくさんの人が亡くなった。近所のおじいさん、おばあさん、友達、友達の両親、町のみんな。

電気もガスも家もなくなり、日が経つにつれ強まる腐敗臭に皆の瞳から光が消えていくように思えた。多くの辛いことが一度に起こったからだ。

そんな中、一筋の光がみえた。自衛隊の方々が救援に来てくれたからだ。数日経ち、住民の中でも被害が少なかった人達が積極的にボランティアに参加し始めた。自分もその中の一人だ。ボランティアとして活動していると、多くの他県から炊き出しに来てくれた人達に出会う。

「なぜ遠い所からこの危険な場所に来てくれたのか」という私の疑問に彼らは、「阪神淡路大震災の時、自分たちも助けてもらったので恩返しをしに来ました。あの時は、ありがとうごさいます。」と答えた。思わずその場で泣きそうになるくらい感動し、感謝した。自分が助けたわけではない、他の人が作り出した「助け合いの連鎖」によつてこの温かさに触れることができた。助け合いの心強さと温かさに胸がいっぱいになった。

様々な人たちが手を差しのべ、「共に頑張ろう」と言ってくれた。自分は独りじゃないと思ひ、また前に進む力を持てた。本当に感謝の限りだ。自分もこうありたいと思った。いつか、あの時はありがとうと言ひ、手を差しのべられたらと、そう思えた。季節が春になる頃、町の瓦礫が減りすぐに海が見えるようになった。私の友人は震災の中で大きな夢を見つけ前へ進んでいる。町も人も前へ進んでいる。その歩みはゆつくりと着実に一歩一歩足場を固めて進んでいる。

あれから3年半。もう3年半？ まだ3年半？ 人によつて

感じ方は違うであろう。人によつて心の傷の大きさが違うのだから。

今はもう、すぐに海は見えない。生まれてから共に「いた」だけに寂しいような、安心したような複雑な気持ちだ。私たちに恵みをもたらす海、心に大きな傷を残していった海。町の人にはこれからも海と共に生きて行く。切っても切れぬ関係とは、まさにこのことを言うのであろうか。

私は、この震災で町民同士のつながりはもちろん、日本中いや、世界中のつながりを強く感じた。顔も名前も知らない、世界の人達が私達のことを想ひ、心配し、行動を起こす姿に、目に見えない「絆」を感じた。私は、この先どんな困難が待つていようと乗り越えてみせる。なぜなら、私は独りではない。共に闘い、立ち上がってくれる仲間がいるということ、震災が教えてくれたからだ。

今回の、予想を大きく上回る震災は、皆の心に、記憶に強く刻まれた。

百年後の人々の安全を願ひ行動を起こしている。

今はまだ途中だけれども、この悲惨な出来事を語り継ぎ、百年後の人々を助けたい。その想ひを胸に掲げ今日を生きて行く。

私達にできることは、この震災を風化させずこれからの世代へ語り継いでいくことだ。

(当時 女川高3年生)

私の震災体験

高橋 佑麻

僕は震災前も震災後もずっと命のことを考えていました。命について書けることを少しだけうれしく思います。震災前は命について考えるといつても「好きな虫がすぐに死ぬのはなぜだろう？」そんなきっかけでした。そんなことから考え続けていて、もつと深く考えることになりました。あの日の震災で。

地震がきたとき、僕は小学校で委員会活動をしていました。下の階では弟が待つてくれました。地震が起きた直後はあまり覚えていません。弟の心配でいっぱいでした。体育館に避難して、弟と会った時、弟が泣き出してしまつて、それに安心したのか僕も泣いてしまいました。でもまだ家族と家が心配でした。（早く家に帰りたい。家に帰れば地震なんかいつもみたいにおさまる。）そう思っていました。

帰宅途中、ラジオで津波警報が聞こえていました。家に帰り、みんなの顔を見て安心してたけれど、警報は鳴ったままでした。（まず

いのでは？）と思い、みんなに、

「避難しようよ。」

と言つたら、親に、

「大丈夫。来ない来ない。」

と言われました。今思うと、ここでしたがわずもつと言えばよかつたなあと思います。津

波がくるのは一瞬でした。

「地面が割れてる！」

そんな話をしながら、ふと外を見てたら、左の家のすぐ左の道路に黒い水が流れてきました。

「えっ？」

僕が固まつてると、目の前の草原と右の道路から同じような黒い水が流れてきました。水が家に押し寄せ、水が上に上がっていき、自分は（大丈夫、大丈夫。）と言いつ聞かせていた。その時、「バリン！」居間の大きい窓が割れ、一気に水が入ってきました。水がまだまだ流れてくる中、お父さんと弟がいな

えてる暇はない。お母さんが水で浮いたタンクにじゃまされていて、それを姉が助けていました。僕はそれをただ見ているだけでした。「足が動かない」そんな表現をよく聞きますよね？それが本当だと初めて知りました。家族が逃げ遅れているのに何もできなかったのが今になつても後悔しています。

水が引いてきてすぐに家族の二人がいないのに気づきました。呼んでも返事がない。それでも大丈夫だと信じました。家族が集まつて助けを待つ時も二人が心配で非常食なんのでどを通りませんでした。家から離れる時に、「本、もつたいないなあ。」とかどうでもいいことばかり考えていました。現実から目をそむけたかつたんだと思います。

数か月がたち、家族の遺体を見た時、信じたくありませんでした。でも、なぜか涙は出ませんでした。信じるのができないまま時はまた過ぎ、二人の遺体を火葬する時に泣きました。思いつきり泣きました。出なければいけない会にも出ず、ずっとずっと泣いていました。泣き止みそうになると次の思い出を思い出し全然泣きやめませんでした。その会が終わるころに泣きやめました。（二人の分もがんばろう。）そう決めて、もう泣かないようにしたけれど、少し思い出すたびに泣い

てしまいます。二人はいつでも、今でも見守ってくれていると思います。

火葬の時、言えなかつたけど今までありがとう。お母さんの優しさはいつでも、どんな時でも、元気にしてくれる魔法みたいでした。姉のしつかりさは、どんなことも安心して任せられる、助けてくれる、姉なのに兄のような、それ以上のような存在でした。

祖母は、

「お墓参りしてないと、忘れられてしまう。」
と言うけれど、僕は絶対にそんなことはないと思います。お墓参りをする時間がないだけで、行きたいと思ってるし、行けなくてもきつと見守ってくれていると常に思っているの
で忘れません。

震災の話が長くなりましたが、僕は「命」
については、先生が言うとおりの答えなんてない
と思います。よく聞く言葉で「失って初め

て気づくもの」でもあるし、「強くて、弱くて、
美しいもの」とも思うし、そのまま「生命を
表すもの」だとも思います。

僕は答えを出せていません。出せるわけが
ありません。でもそれでいいと思っています。
僕たちはまだまだ「命」と付き合っていくま
す。これからもずっと考えていきたいです。

(当時 東松島・野蒜小5年生)

「私の震災体験」を読んで

黒須 政貴

私は今日、佑麻君の文章を読み、改めて「命」というものについて考えさせられました。私は震災が起きた3月11日は、浜市小学校にいました。正直、私の体験は佑麻君に比べたらぜんぜん悲しいようなものではない
ありません。

実際、私の家族はもちろん、親戚の人たちも亡くなっていません。ですから、震災に対する思いが、佑麻君のように自分の家族など身近な人が亡くなつてしまった人たちに比べ、今まで甘かつたと思います。

震災は正直にいうと「自然」、つまりこの地域の日本という場所に住んでいる限り切つても切り離せないものです。今回の震災では東日本の太平洋沿岸部ですごい被害が出ました。そしてたくさん尊い命がたつた一日で奪われてしまいました。

言い方はよくないかもしれませんが、今回の震災で亡くなつてしまつた方々の命を無駄にしてはいけないと思います。これから先、いかに科学が進歩したとしても、その科学が自然を基につくられているとしたら

完全に防ぐことは不可能だと思います。だからこそ津波に対応できるよ
う日々の避難訓練などを真剣に行い、今回のことを伝えていかなければ
なりません。

「命とは何か」という問いについて少し離れてしまいました。私なりに
「命」というものは「自分のものであり、他人のためにもなる」と思い
ます。「命」は一人に一個しかありません。どんな人でも平等に一つです。
しかし、失い方は平等ではありません。他人に自分の命が奪われること
もあれば、「自然」に奪われてしまうこともあります。また、自分で命
を失うことも可能ですが、ほとんどは他人やものが関わっています。ひ
と言で「命」と言いますが、その一つ一つの「命」にそれぞれの意味が
あるはずですよ。

今回で失われてしまった「命」というものは決して無駄にならないはず
です。必ずこれから先、未来で役立つことだと思います。決して「命」
は奪つていいものではありません。人間以外にもこの世界に存在する生
き物一つ一つに「命」があります。今の世界はその一つ一つの「命の価
値」が平等ではありません。何かの栄養になり、その動植物の生きる糧
となるのが平等であると思えます。「命の価値」は誰にも決められま
せん。たった一つの「命」が誰かのために役立てば私はうれしいです。

(当時 東松島・浜市小5年生)

教室の報告

私の教室

岩 渕 恭 子

ここ数年、私の受け持つクラスには1〜2名の特別な支援を要する子がいます。ADHDと呼ばれる子であったり、高機能自閉症と言われる子であったりしますが、その子達の存在がクラスにとつてもありがたい存在であり、その子達をぬきにしては、私のクラス作りは語れない気がしています。

昨年は1年生担任でした。A君は、教室をうろうろ歩きまわり、床に寝そべってしまうこともある子です。教室を出ていってしまい、支援員さんに追いかけてもらうこともたびたびでした。周りの子ども達には、

「今はみんなと同じようにはできないけれど、みんなと同じように毎日少しずつ大きくなっていくからね。みんなといっしょに勉強して大きくなって、3月にはりっぱな2年生になるように応援してね。」

と話して、協力をもらいました。子どもたちは、大人よりずっと関わり上手です。A君に通じることがをちゃ

れしくなりました。」
A君をダメな子、悪い子として見るのではなく、A君の成長に目を向けている優しいわが子の姿がうれしいのです。そんな話を聞いて私もうれしくなりました。

2学期、A君はみんなと同じ行動はできなくても、自分の行動を選ぶことができるようになってきました。私が選択肢を4つぐらい考えてミニホワイトボードに書いて見せます。問題行動が出たときです。たとえば、
1. 先生に怒ってもらおう
2. このまま寝ている
3. みんなといっしょに勉強をする
4. 教室で本を読む
5. 積み木で遊ぶ
などです。本人ができそうなこと、いやがりそうなこと、本来すべきことなどを混ぜて選択肢を作りました。指を指すだけでしたが、自分で選んだということが大事だと考えました。そして選んだ行動については、支援員さんにそばで見てもらうようにしました。

この方法は、他の子どもたちにも使いました。
1年生が廊下を勢いよく走った時は「ちょっとおいで。」と呼びます。
「どうして呼ばれたかわかる?」
「廊下を走ったから。」
「先生はみんなに廊下を静かに歩く子になってほしいの。どうすればいい?」
ここで選択肢です。

1. 先生に大きな声で叱ってもらおう
2. おしりぺんぺんしてもらおう
3. 先生のお説教
4. 何もしなくてもだいじょうぶ
みんな4番を選びます。
そして、私が「何もしなくてもだいじょうぶだなんて、うれしいなあ。」と言っているとこつとします。それでおしまいです。叱ることがぐつと少なくなりました。

毎日、放課後になると、不思議にA君も落ち着き、いろいろな話をします。そばにはBちゃん、Cちゃんがいます。一日を振り返って、できたことを思い出すことにしました。1年生の子どもたちは、毎日振り返りの日記を書いていたのですが、A君は書くことができずにいました。



ランドセルの道具を自分で出せたね。休み時間友達とブランコしたね。2時間目の始めに、みんなと同じ時間に座れたね。……など、小さなよかったことを思い出し、ホワイトボードに書き出して、花丸をつけました。私が思い出したことには、花丸1個、自分で出したことには、花丸を2個つけました。自分でいいことを思い出すとしてるのが分かりました。

「今日は20個花丸になった。」そのホワイトボードを手に、うれしそうです。そばにいたBちゃん達と記念撮影してから、帰ることにしました。Bちゃんが「私もやるう。」と言って同じようにやったことがありません。でも、思ったよりうれしいものではなかったようです。Bちゃんにとっては、A君の花丸が増えることの方がうれしかったようでした。そして、A君のがんばったこともたくさん見つけてくれるのでした。そんな日が何日も続きました。

ある日、A君は、それをせずに帰りたい様子でした。遊びたい何かがあるようでした。A君は律義に、「先生、今日は、しなくてもいい？」と聞きます。

「いいよ、何かあるの？」



と聞くと、返事もそこそこに帰ってしまいました。そして次の日もそんな様子で申し訳なきように言うので、「いいんだよ。A君は、もう花丸の振り返りは卒業だね。」

と何気なく言ったのです。その卒業ということがよほどうれしかったのでしょう。家に帰って、おうちの人に「ほくは、花丸いっぱい振り返りは卒業。」と言ったのだそうです。

後でその話を聞いたわけですが、このことは私にとっても大きな出来事でした。自分の成長を「卒業」という言葉で実感できたのだと思いました。こ

のころから、少しずつ私の話も受け容れてくれることが多くなってきました。

そのA君、2年生に進級し、ほぼみんなと同じように学習に取り組めるようになったのです。担任は男の先生です。去年の苦労は何だったのかとは思いますが、ともかく喜ぶべきことです。廊下で会った時に聞いてみました。

「2年生になったらりっぱだねえ。もう立って歩いたりしないんだってね。どうしたらそうできるようになったか教えてくれる？」

すると、「ほく、決めたんだ。2年生になる3日前に、りっぱにするって決めた。」

という返事でした。こんなことであるのですね。廊下でごろごろしたり、どうしようもなく暴れたりしていたのに、自分で決めることができたなんて。とにかく今は、昨年とは違う姿で暮らしているのです。

昨年、私はA君がいたから、教室で全員に同じことを同じようにするように求めることはできませんでした。それは、子ども達にとって多様性を認めてもらえるという安心感があったことのようにも思えます。そして、子どもたちはA君に関わる私の姿をいつも見っていました。私が他の子と同じようにA君を大事に考えていたことは伝わっていたと思います。また、指示はA君にも伝わるように、目に見えるように示しました。授業の始まりの時間など

も大きな数字で貼っておきました。それも、子ども達にとっては大きな安心だったと思います。

絵本もたくさん読みました。ぬいぐるみを用意して、ぬいぐるみにもたくさん語ってもらいました。お話で語れば伝わることは多くあります。そんな1年生の教室でした。

今私は、3年生24人を担任しています。

なんとちょうど50歳違いの子どもたちです。半世紀も違う時代を生きている子ども達と、対等に語り合い、学び合い、笑い合う毎日が、わたしにとってかけがいのない日常です。そして今年も学習に取り組もうとしないD君がいます。私のいうことも、自分に都合の悪いことは一切聞きません。「いいから、あつちいって。」

「やんないよ。」無理にやらせようとすると、ノートを破いたり、捨ててしまったりします。自信がないのかもしれない。自分のできなさを知られたくないのかもしれない。

でも、子どもらしいすてきな感覚をもっているのです。興味のあることには、目をきらきらさせて取り組みます。休み時間は思い切り友達と遊べるのです。このいいところを強みとして生かせるようにするには、どうすればいいか、考えながらの毎日です。

報告 フォーラム 「子どもの今と未来を考える」

PART VI

「今どきの放課後事情」を考える

子どもたちの放課後が「忙しい」と言われるようになって久しい。

私の育った頃は（昭和30年代に小学生だった）では、放課後はまるごと自由でのんびりしたものであった。決して活発な子ではなかった私もランドセルを玄関先にほおって、近くの空き地やお寺の境内で目いっぱい遊んだ。習い事はおろか、宿題も毎日のことではなかったし、帰宅してから教科書をひらくことなどめつたになかった。

それでも中高年生になれば部活もあったし、図書館の本を読んで過す時間や、家庭での学習の時間も増えてはいつたが、基本的にはやはり解放感に満ちた、好きなことができない「放課後の時間」だったように思う。

放課後という時間帯に区切つて今どきの子どもたちの生活を見てみたいこと、その現状を当の子ども達はどのように受け止めているのか少しでも理解したいと願つて、4人の方にそれぞれの立場から見てきた子どもたちの姿を語つていただいた。また、僅かなデータではあるが、3つの小学校の5年生もしくは6年生のクラスをお願いして、アンケートに答えていただいたものも参考にしながら話し合いを持った。

◎（話題提供の皆さんのお話から）

◎ 放課後支援のボランティアグループで活動している宮教大の石山さんには、そこで接する子どもたちの様子とご自身の子ども時代を振り返つてお話いただいた。

ボランティアでは毎週金曜日の放課後、連坊小学校で子どもたちとドッチボールをしている。1・2年生は毎回30〜40人と賑やかで喧嘩もあるが生き生きとしている。最近他の学校で教育実習をしたが、授業中の子どもたちの違いに驚いた。

学童クラブが学校に隣接しているので、そこに登録している子ども達の参加が多いが、ドッチボールが終われば習い事に行く子どもも少なくないので、この時間は貴重な様子。技術指導はせず、低学年は周りで見守つて安全確保。高学年はたまに一緒にプレーする。高学年は隔週で10人〜15人と少ないが、習い事などで忙しいらしい。

自身の子どもの時代は朝も行間も放課後も学校で遊んだ。教育実習した学校は遠方から通学の子も多く4時には完全下校となる。連坊小は4時30分だがそれまで校庭で遊んでいる子はあまり見かけない。教師を志す上で子どもたちと過す経験を大切にしたい。

◎ 現在高校3年、中学2年の男のお子さんをお持ちの高橋誠子さんには、保護者の立場から、お子さんの小学生時代なども振り返りながらお話いただいた。

上の子は小学生時代、朝約束しないと放課後誰とも遊ばなくて家にいるしかなかった。下の子は2、3年前まで野球のスポ少に所属。月曜日以外は連日練習でへとへと、帰ってきたら食事をして寝るといふ生活で、ゲームやテレビを見る時間などなかったが不満はないようだった。中学1年からラインをはじめ、部活仲間とのやりとりもライン。そこに入らないと仲間にならない。

最近の子どもたちは疲れている印象。2年生から6時間授業。小学生の方が帰宅が遅いこともあった。中学生になつて部活終了後はスポーツクラブで同じく野球。子どもは好きだから続くようだが、何かと親が対応しなければならず、それが不可能だと続けられない。宿題は殆どなく自主勉強だった。

◎ 宮城野児童館でお仕事をされている菅井仁さんからは、児童館の様子、児童（学童）クラブでの子どもたちの様子をお話いただいた。

児童館は仙台市内に108館あり、いわば屋根付き公園。この児童館は3つの小学校区をカバーしている。近隣の中学生や仙台工業高の定時制の生徒たちも学校が始まる前の時間に立ち寄つていたり、児童クラブに登録していない（自由来館）の利用も多く異年齢が集



まる、今ときには貴重な場所。

子どもたちに「夢の児童館」を描いてと言ったら、5人のうち2人がまず、ベッドから描いた。3年生は水曜日以外毎日6時間。

児童館は小学校の敷地内にあり、校庭は学校で使用してなければいつでも自由に使用させてもらっているが、必ず職員が付く。自由来館の子も含めてゲームは禁止している。運営懇談会で話し合っって木登りもOKにした。いつも異年齢集団で遊び、昔遊びなどもさかんに取り入れている。児童クラブにいる子たちはそうでない子より豊かな遊びの経験に恵まれていると感じる。子ども時代は現在の自分の土壌と思う。

◎ 荒町小学校に勤務の佐々さんには、学区の様子をお話いただいた。

転入転出の多い地域で毎年30人ぐらいの転校生を迎える。3年前、隣接して児童館併設の児童クラブができ、40人ぐらい登録。民間の学童に行く子も多いが（6年生まで対象なので）、そこは毎日バスで迎えに来て、習い事のメニューも多いらしい。

近くに中高一貫校があるので4年生から塾通いが増加する。学校の周りは塾だらけ。でも4時20分の下校時間まで遊んでいる子は多く、なかなか帰らない。毎週水曜日の午後はできるだけ会議は入れないようにして、子どもたちと残って勉強したり、委員会活動の時間に充てている。地域的にスポ少はあまり熱心でなく、平日週一回と土日のどちらか程度。今の子はゲームで遊ぶことも多く、紛失したなどの騒ぎも。公園で遊んでいる子がうるさいと地域の人から学校に苦情がきたりする、自由に遊べる児童館は希少価値。学校をこえ

て五橋公園に集まって遊ぶ子どもも多く、学校として見まわりをすることもある。

《話し合いから》

○ 大人のしていることが全部子ども向けにも入れられていく。子ども固有の文化がない。

○ 佐々さんから報告されたような「うちの学校では」みたいなのを、地域のいくつかの学校で集まって交流したら、自分たちもこんなことに取り組もうとか発見がある。だろうし、つながりも生まれてくるのでは。

○ 現象としては時代的に変化しているものがあるが、もともと子どもが持っている好奇心は環境があれば引き出せるもの。石山さんのように自由な立場で関わってくれる大人がいることは子どもにとって大切。子どもから学ぶこともある。携帯やラインは今の子どもたちにとっては中毒のようだ。全身で遊ぶ経験があったら違ってくる。

○ ベッドの話は考えさせられる。ゆつくりしたいということだろう。楽しいことやワクワクする関わりや空間、群れる自由な場時に叱られたりしながら大人になってきた。

○ 今のゲームは基本的に一人で遊ぶものだし、良くも悪くも大人に管理された世界。そのことが大人になっていく上でどうなのだろうか。

○ 昔も今も子どもは遊ぶのは楽しいは同じ。環境が変わってきてしまった。そういう意味では大人が問われていることは大きい。○ 大人たちがなかなか子どもだけの世界にしてくれない。小さなトラブルでも「いじめ」などと親が関わってきてしまうのはどう

か。

○ 自由に遊べる場所って「広さ」ではない。階段の下で「秘密基地」とか言って楽しめる。ゲームやテレビなど昔よりアイテムは増えたが、ものがない時代、想像したり空想したりできた。

○ 今の子の「疲れ」はストレスのことではないのか。

アンケートの読み取りについて紹介する紙幅がなくなってしまうが、意外に感じたのはサッカーをしている子は「もっとサッカーをしたい」と希望し、読書の好きな子は「それをもっと」と願っているという結果だった。習い事の多い子が「もっと」と答えているケースもあって考え込んでしまった。子どもたちにとって経験できていない世界を自分に引き寄せるのは難しいということなのだろう。「もっと遊ぶ時間が欲しいか」の問いにも圧倒的な希望はない。いわば現状肯定的な反応が多いのだ。自分を取り巻く「現実」が考え方や発想を規定してしまう大きな力になるということだろうか。だからこそ大人の私たちに、いかに子どもたちの周りに豊かな環境文化を用意すべきかが問われているということなのだろう。

気になる状況はいろいろあるし、どれも複層的で難しい課題だ。フォーラムでは、そうした現状を語り合いながらも、話題提供の皆さんの言葉の端々に子どもたちに寄り添う思いと、子どもたちへの温かいまなざしが貫かれていた。そこに、私たちが手放してはならないものが示されていたと思う。

（事務局 須藤道子）



1934（昭和9）年生まれの私は、今年80歳の大台に達しました。1941年に、新設された国民学校（現在の小学校）に入學しましたが、その年の12月には太平洋戦争が始まりました。国民学校では軍国少年として育てられ、いずれば軍人になるつもりでした。

5年生の時に終戦を迎えたのですが、教科書の墨塗りをさせられました。戦後の六・三制の学制改革で、1947年には全員が新制中学校へ進學し、男女共学となりました。その後、大学卒業までの16年間、多くの先生との出会いがありました。ここでは、お二人の先生の出会話を語ってみたいと思います。

お一人は、1943年に国民学校3年の担任になられた長島順子先生です。先生は、当時の教員不足の人事で、女学校（5年制・現在の高校2年に相当する）を卒業されて直ぐ、「代用教員」になられた方でした。私が大学生の頃だったと思いますが、何人かの友だちと先生宅に遊びに行つたとき、先生が、クラス対抗（それが何だっ

わたしの出会った先生 8

私の出会った二人の先生



伊藤博義

たかは覚えていない）における不成績を厳しく叱つたとき、「他の子どもたちはみんな下を向いて聞いていたのに、あなただけは顔を上げて私を見ていました」と、当時の思い出話を聞かされました。社会人になつてからも毎年、長島先生に年賀状を出していました。が、ある年、「もう年賀状を寄さないで欲しい」という手紙をもら

でしよう。やはり戦争の犠牲者だつたと思います。

もうお一人は、中学1年生の担任であつた小林竹市先生です。先生は、旧制の新潟高校を卒業した後、東大受験に失敗して浪人生活をしていた時に誘われて中学校教員になられた方でした。当時、新設の中学校は、生徒数は800人ぐらいなのに、急ぎよ集められた

芸会では「シエークスピアの『ベ二スの商人』をやつたらどうか」と薦められました。おかげで私は生まれて初めて徹夜して、坪内逍遙の難解な訳本を学芸会向きに書き直したのです。

その後、先生は30数年におよぶ教員生活（後半は高校教員）を全うして定年で退職されました。退職された折に、友人と2人で先生宅をお訪ねした時に、先生が、「お前らを教えていた頃が一番良かったなあ」と、しみじみとした口調で言われました。30数年に及ぶ教師歴があるのに、「最初のときの教員体験が一番良かった」というのです。伸び伸びと自由な雰囲気だつた中学教員時代から、次第に学校現場に対する管理体制が厳しくなつていったのだらうと思います。

いました。「あなたの年賀状を見ると、あの頃のことを思い出して、未熟だつた自分が恥ずかしいし、辛くなるから」とのことでした。私はびつくりしました。ただ懐かしいだけで年賀状を出していたのですが、そのお手紙を頂いた後は止めざるを得ませんでした。先生は、戦時中の学校教師だつた頃の自分をずっと気にしておられたの

教員はたつた13人だけでした。多種多様な教師群像で、中学2年生のときの担任はお坊さんで、法事になると「伊藤、私の代わりに出席を取つておいてくれ」と言い残していなくなるのです。中には、生徒から集めたお金を持ち逃げした先生もいました。

小林先生は、数学担当でしたが、朗々とした声で歌曲を歌われ、学

最近、宮教大の卒業生で教員になつてきた者が、定年前に退職する例が増えてきたのが気になります。教員として期待していた「教え子」が、定年前に辞めていくのは大変残念な気がします。

（宮城教育大学名誉教授

● 教育時評

国家が「道徳」の

教師になる恐れ

— 文部科学省

『私たちの道徳』を読んで—

中森 孜郎

文部科学省がつくって、全国の小中学校の子どもに無料で配布した『道徳教材』、『私たちの道徳』全4冊(小学校低・中・高学年、および中学校)を、この程ようやく手に入れ、早速目を通した。その感想の一端を述べてみたい。文科省は近々中央教育審議会を18年度から正式に教科化する方針であるとのこと、それまでの間は、この教材を学校現場に活用させようというわけである。教科書を検定する立場の文科省が、そのモデルをつくったとも言え、全国の学校がこれを使用することにすれば、実質的にはこれが国定教科書ということになる。

これまで配られてきた「心の

ノート」の巻末には、作成協力者や編集者の氏名・所属が明記されていたが、今回のものにはそれがまったくなく、しかも「心のノート」に比してはるかに分厚く、まさに教科書そのものという感じがする。そして、誰からも検定を受けていないというわけである。戦前の国定教科書の復活という他ない。

◇ ◇ ◇

その内容・構成を見ると、学習指導要領に忠実に準拠しており、小学校低・中・高学年の3冊と中学の1冊、そのいずれの構成もまったくと言ってよいほど一致している。例えば、中学校の場合、大見出しは、「1 自分を見つめ伸ばして」「2 人と支え合って」「3 生命を輝かせて」「4 社会に生きる一員として」となっているが、他の3冊とも、発達段階に応じて少しずつ表現が異なるだけである。

そして、4では、家族の一員として、学校の一員として、郷土の一員として、国家の一員として、世界の一員として、という具合に、子どもを中心に、同心円拡大的につなげて、それぞれの集団への帰属意識を高め、それぞれのかを考えさせようとい

意図が明確である。

そして、それぞれの項目のところで、歴史上の人物や各分野で著名な人の言葉などを「読み物」として配し、それを読んで子どもたちに話し合わせるという指導方法をとるようになっていく。それぞれの読み物は、当然そこで育てたい道徳の徳目に対応して選ばれているわけであるから、話し合いの結果は、そこに落ち着くことになると思われる。書名の『私たちの道徳』は、いかにも子どもが主体に見えて、実は政府が育てたい道徳ではないか。この書名から、そうしたまやかしの不道徳性を私は感じる。全国の学校で、この書による同一の授業が行われていることを考えると、ぞっとする。

この「道徳教材」なるものを見てみると、私が小学生のとき受けた戦前の修身科教育のことが甦ってくる。下村博文部科学大臣は記者会見で、「教育勅語そのものの中身は、至極まっとうなことが書かれていると思います。」と述べている。たしかに、教育勅語には「父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ」などどもっともらしい徳目が書かれているが、最終的にはそれらが「一旦緩急あれば義勇公に奉じ、以

て天壤無窮の皇運を扶翼すべし」というところに収斂されているわけである。

安倍首相は第1次内閣のとき、教育基本法を「改正」し、新たに5項目の教育目標を定めたが、彼の主眼は最後の項目の「愛国心」であった。それが、公明党の同意を得られず、「国を愛する態度」という表現で妥協せざるを得なかったというのが事実経過である。今、安倍政権は、憲法9条の恣意的な拡大解釈によって、わが国もアメリカとともに戦争でできる国に変えようとしているが、「道徳」を「特別の教科」として教科化しようとしていることは、そのことと無関係ではない、と私には思われる。戦前の教育でも、修身科が筆頭科目と位置づけられ、特別に重視されていた。この「道徳教材」冊子に添えられた下村文科科学大臣の添え書きの文面には、親切にも家庭や地域でもこれを活用することを呼びかけているが、先の教育基本法「改正」で、「第10条家庭教育」が新たに掲げられたことを思い起こした。まさに、保護者、地域住民ぐるみの道徳教育を押し進めようとしているわけである。

(研究センター代表運営委員)

センターの動き

7月

3日 TBSの金平さんに手紙を送る。タイトルの確認など。
4日 午後、通信発送作業。学会時のフィールドワー

クのプランできる。
7日 フォーラムの放課後アンケート用紙を4人の方に発送。7時から、制野さんの「命の授業」についての話し合い。
9日 午後、東向陽台小を訪問。
11日 午後事務局会、通信

とフォーラムが議題の中心。千葉・本田さんと学会の相談。
14日 国語講座の打ち合わせ会、午後、哲学講座。ソクラテスの章。「高校生」の公開授業についての学校長と社会科主任あて依頼文とチラシポスター

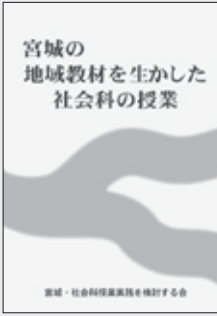
◆本の紹介◆

「宮城の地域教材を生かした社会科の授業」

編集 宮城・社会科授業実践を検討する会

10年ほど前までに、宮城県内各地の小学校で実践された、社会科の授業集です。

低学年の内容は「はたらく人空間認識」、中学年は「育てる仕事・地域調べ」、高学年は「地域から考える産業・歴史」など。それぞれの実践は、地域の条件を生かしてどんな学習ができるか、授業者が足をつかい、地域の人の仕事や歴史に学びつつ、各学年で大切にしたいと考えていることを核として展開されています。



宮城の地域教材を生かした社会科の授業

地域の歴史を調べるなかで、子どもたちの力で新しい物語が生み出され、紙芝居・図工作品・劇としての発表など、各教科の授業時数が限られているなか、他教科の学習と関連させるなど、多様な学習の広がりが見られ、これからの授業づくりの参考になると思います。また、実践全体を通してみること、宮城の社会科実践の歴史の一端にも触れることができるとも言えます。紹介した実践は、宮城県教育研究会でのレポート、「カマラード」（宮城民教連機関誌）、「教育文化」（宮教組機関誌）などに掲載された実践から、「地域教材」の活用観点に絞って編集されています。

価額 1000円（税込）（B5版 246ページ）
発行 きた出版 (Tel 022-791-2021 Fax 022-791-2022)

* 問い合わせは「みやぎ教育文化研究センター」でも受けます。

を県内全高校に発送。
16日 菊池鮮さん宅を訪ねる。聴き取り。約2時間。
17日 田中孝彦さんと課題別報告者のことで電話で話し合う。高教組各分会に高校生の公開授業の働きかけの依頼文を発送。
19日 国語講座第2回。
20日 学会第2回実行委員会。現地は7名参加。本部は理事参加。
23日 若い教師とのつどい「子どもと授業を考える会」の月例会。前回とはひとりが4人、先輩が3人。
25日 2〜5時まで臨時の運営委員会。参加者多く、話し合いの内容もよかった。社会科実践書完成。
26日 子どもフォーラム子どもたちの放課後事情。
28日 通信76号「被災地の子どもたちの声」の原稿依頼。
30日 山形孝夫さん来室。
31日 2時から、道徳プロジェクトの集まり。メンバー5人。話す内容がバラエティに富み、非常に有意義な時間になる。

（8月）
4日 S中学校に行く。講師2人との教材研究のため、教材は平家物語。午後、学会参加案内文づくり。
5日 学会案内をどんなものにするか2人で検討。
6日 学会案内づくり開始。
7日 学会案内づくり。明日発送へのメドが立つ。
8日 センター関係者に、学会案内の発送。東北大生協と学会懇親会についての打ち合わせ。高校生の応募1名ある。
18日 今日からセンター再開。ずいぶん休んだ感じがするし、仕事もたまる。
21日 清岡さん、チラシ用のコンパクトな学会パンフをつくる。
22日 事務局会議。1カ月ぶり。その間の報告事項多い。議題は学会研究会のことだけ。どうしたらこちらの参加者を増やすか。それも多様な子どもへの援助者。夕方、3人目の申し込み入る。
29日 清岡さん、高校の個人へ依頼の電話をかけ始める。学会の県内申し込み、予想より入ってくる。
30日 国語の講座の3回目。

（9月）
2日 清岡さん、小牛田に行く。
3日 夕方、E高校2年生女子2名の受講申し込み。本人の直接申し込みはことさらうれしい。
5日 H高の高校生ひとり参加の連絡あり。
6日 本部から上田・渡辺さんが来て5時近くまで最後の打ち合わせ。こちらは3人。あとは、参加者を集めることのみ課題。
8日 午後、哲学講座。参加11人。プラトンの話。I高校から7名の参加者の連絡あり。夕方、金平さんから電話。
10日 学会案内発送の再開。
12日 事務局会議。学会の事務打ち合わせの報告をもとに話し合う。
14日 1時半から「道徳と教育を考える会。現場関係から7名参加。次は実際の授業報告も出し合うことに。
17日 K高校から7名参加とのこと、20名を超える。いいペースだ。
18日 上田さんにメールを入れる。相談センターから学会に全員参加と言ってくる。ありがたい。
19日 石巻の阿部さんから子どもの作文3本届く。なんともうれしい。教師外の方が書き手を探してくれた。
24日 東北大生協と懇親会の献立を検討。夜、「若い教師の学びの会」月例会。
25日 学会前日。清岡さん奮闘。細部まで準備。12時に千葉保夫さんと一緒に制野さんの授業を観に鳴瀬未来中に行く。
26日 被災地フィールドワーク。33名参加。2時から資料の袋詰め。
27日 学会第1日目。受付時の初めは混乱したようだが無事動き出す。
28日 3時45分、無事終了。みんなに助けられた。
30日 相談センターにあいさつ。「とてもよかった」と言ってくれる。素直にうれしくなる。

（春日）

